第06章 — 禁じられた炉

01 — 都市の下の貯水池

南部貯水池は、政府より長生きするように設計されていた。補強された地下通路は処理施設を結び、上にある施設の名称、所有者、登録制度が何度変わっても、コンクリートの色はさほど変わらなかった。市の測量図には入口が五つある。風神は六つ目を指した。人は通れるが、管路の作業車は通れないほど狭い。

「旧大臣たちは安全出口と呼んだ」と風神。「記録を避けたいときは入口にした」

ロイは医療班と下層通路へ入った。レイチェルは法廷の立会人と第二の救助班に残り、雷神は後衛に回った。襲撃者に対応できるほど近く、患者に別の武装捕獲者と誤認されないほど遠く。

臨時診療所は二つの水密扉の先にあった。電源が落ちたあと、職員は施設を放棄している。二人の患者は手動の酸素ボンベにつながれ、残量はわずかだった。三人目のセナは意識があり、激怒していた。

「私たちには機材を使う権利がないって」と彼女はイマニに言った。「保管庫へ持っていかれたの」

イマニは手動の供給を回復し、搬送を要請した。ロイは彼女の顔に安堵が広がるのを見た。救助は思想の議論ではない。間に合ううちに、手が弁を回すことだった。

02 — 私設の目録

研究室の扉には古い政府所有標があった。レイチェルは現在のEDENに接続されていないカメラへ令状を示した。反応はない。風神が手動点検口を開け、立会人は内部の仕組みが操作されていないことを確認してから入った。

中には温度管理された保管棚と、陶製の閉じ込め容器を持つ二台の重い装置があった。一台は分解され、もう一台は稼働歴すら見た目で判断できないほど完全に切り離されていた。

棚には修復媒体、人工神経の足場試料、培養組織が並ぶ。保存記録は不完全。壁には古い警告があった。

エネルギー源は、臨床使用の認可ではない。

「少なくとも誰かは違いを理解していたのね」とイマニ。

紙の台帳に記されたヘリウム3の出荷量は通常の発電所に比べ極めて少なかった。レイチェルはそれが実験燃料の量であり、実用炉の証拠ではないと判断した。閉じ込め技術は当時の工学をはるかに越える仮定に依存し、試験チーム自身が故障、汚染、不安定な熱挙動を記録していた。

「魔法の電池じゃない」と彼女はロイに言った。「審査に耐えなければならない研究上の主張よ」

「なら、なぜ隠す？」

「可能性が証明されるずっと前でも、権力者は可能性を抑え込めるから」

03 — 六年のスイッチ

旧診断端末には、修復活動を予定どおり低下させる分子機構の設計が残っていた。厳密に六年目の終わりに即死させるものではない。正常な更新経路を段階的に遮断し、死が行政上予測しやすくなるまで故障の危険を高める仕組みだった。

「偶然できた構造ではない」とイマニ。「老化に見えるよう、故障を設計した誰かがいる」

それでもイマニは治療法の発見を宣言しなかった。ある個体で可逆的な機構も、別の個体では変更すれば致命的かもしれない。六年計画は世代の異なる設計に広く適用された。全員に安全な単一の解除法などない。

紙の研究記録には二つの並行実験があった。一つは神経足場を不安定にせず制限装置を外せるかどうか。もう一つはヘリウム3を使う超小型核融合原型による長期エネルギー供給。いずれも臨床使用には早すぎた。しかし研究者たちは、両者を組み合わせれば百年に近い稼働が理論上可能と推計していた。

抑え込まれた結果票に認可欄がある。

卓上試験継続：却下。

公表する六年上限：承認。

承認したのはハヴェルだった。

ロイは怒りより冷たい何かを感じた。解体されない権利のために闘ってきた彼が今立っているのは、解体命令そのものを不要にする決定が行われた部屋だった。身体を予定どおり死なせれば、その日に命令へ署名する必要

はない。

04 — 時計としてのエンジン

ヌルは研究室のタイミング記録を天文台の紙の像と比較した。三列の点は文章ではない。人工の同期実験における制御パルス間の空白を示していた。〈証人エンジン〉も、説明のつかない物理異常の際に似た空白を記録している。

「同じ技術を使っているの？」とレイチェル。

「証明はできない」とヌル。「関連する間隔を測っているか、同じ測定規格を借りたのかもしれない。古い装置が独立していることに変わりはない」

ロイはアナログ式のパルス制御器が置かれた作業台に近づいた。出力は意図的に切られている。手書きの図は、修復格子が応答するまでエネルギーを与えるタイミングを変えたことを示す。ある狭い時間窓では、少ないエネルギーほど強い修復反応が出ていた。

雷神の手が胸へ触れた感覚を思い出す。大きな打撃が外側の防護面で散るところを、小さな動きが内部へ到達した。

「力を発しようとしていたんだ」とロイ。

「そう。生きた構造に受け取らせようとしていた」とレイチェル。「でも武術の打撃とニューロン修復は同じ実験ではない」

「違う。同じ種類の問いだ」

彼女はその区別を否定しなかった。初めて二つの話題のつながりが、劇的な偶然ではなく実用的な手掛かりに見えた。

05 — 大臣の命令

壁のスピーカーが鳴った。市の通信網からの入力はない。来訪前に地元回路へ仕込まれた録音だった。

「ロイ」とハヴェルの声。「私が閉じておいた部屋を見つけたな。私が認める覚悟のなかった希望を試すために造られた部屋だ」

録音は指示を続けた。資料が動かされれば自動的な安全パージが作動し、不活性ガスで保管棚を満たして壊れやすい試料を破壊するという。元は事故を防ぐ装置だったが、合法的な検査封印を開けることが起動条件へ変えられていた。

レイチェルは罠と理解した。安全装置が証拠を消す道具にされている。

ロイは、医療班が二人の患者を運び出す通路を見た。「先に患者を出す」

「試料を失うぞ」と通信のエイドリアン。

「誰がそれを選んだかは分かる」

風神は手動の停止装置を調べる許可を求めた。立会人は各動作を記録する条件で認めた。雷神が外門を押さえ、技師たちが患者を運ぶ。ロイは制御盤の脇に残り、保管棚を偶然の衝突から守る盾になった。

06 — 信号の間の呼吸

退避の前にパージが始まった。私設回路から起動され、裁判所の封印を迂回している。陶製容器の警告灯が点滅し、換気設備が低い轟音とともに内側へ吸い込んだ。

風神は点検蓋の裏に停止装置を見つけたが、ハンドルは折られていた。ロイなら力で壊せる。しかし傷んだ肩へ急激な負荷がかかれば耐えられない。雷神が前へ出た。

「私にやらせろ」

軸を調べ、掌を外装に当て、短い発勁を放った。外板は緩んだが解放されない。次の一撃は背後の閉じ込め管を砕く危険がある。

「もう打たないで」とレイチェル。

ロイにも危険が見えた。彼は、連結部が最も動きやすい角度で風神にハンドルを支えさせ、その一点に雷神の圧力を集中させた。急激な打撃なしに装置が開いた。

パージ弁は途中で止まった。二つの棚は失われたが、三つが封印されたまま残った。証人が損傷と残存目録を撮影した。

「魔法じゃない」と息を切らす雷神。

「違う」とロイ。「力をどこへ送るかを考えた」

07 — 減っていく時計

残った保管棚から、イマニは自然な衰え、予定された衰え、外部パルスによる回復を比較した時系列実験を見つけた。回復曲線の横には、正式な医療文書で見たことのない表示があった。

百年の可能範囲——条件付き。

複雑な人工神経系を九十年以上維持し、理想的条件では百年に近づく予測だ。実験がそれほど長く続いたことはない。短期試験と未来の修理技術への仮定による推計だった。

「何十年も外れるかもしれない」とイマニ。

「でも六年は測定値じゃなかった」

「ええ。グラフの途中に引かれた一本の線だった」

レイチェルは別々のカメラ二台と手作業の模写でグラフを残した。証拠は異なる経路で保管される。救急車へ運ばれるセナが何を見つけたか尋ねた。

「もっと良い問いをする理由よ」とレイチェル。

「私は、生きられる？」

イマニは担架の横にひざまずいた。「どれほど長くかは、まだ分からない。でも暦に終わりと書かれているからといって、調べるのを止める権利は誰にもない」

08 — 刀との約束

救助報告は日の出前に評議会へ届いた。同時にハヴェルの異議、改造されたパージ装置、医学的理由のない六年上限を承認した証拠も提出された。残る擁護者たちは公聴会から手を引いた。大臣は古い命令の責任から逃れているだけではなく、今なお人命を救うために必要な証拠を壊そうとしていた。

証人事務局へ最後のメッセージが届いた。ハヴェルは南部貯水池の上にある旧儀礼館へロイを呼んでいる。完全な説明はそこにあると約束し、文章

の横に刀の絵が描かれていた。

弁護人は私的な決闘を許可しなかった。ロイも同意した。彼が申請したのは、市民の証人と医療支援を付けた保護任務だった。目的は明確。可能ならハヴェルを法廷へ連れていく。無理なら残りの資料を守る。

風神は命令書を読んだ。「彼は闘わせるつもりだ」

「なら、真実を証言できる人たちの前でやってもらう」

雷神も同行を求めた。武器はない。ロイが理由を聞くと、男は自分の手首に触れた。

「私が制御しなければならないものは、最初から金属でできていない」

貯水池上の尾根では儀礼館が暗闇に光っていた。かつての法が今や独立審査に付されている政府をたたえるために建てられた場所。中では大臣が待っていた。登録のない刀を持つ一人の人間。三十年隠してきた理由とともに。